

歴史をかえた日中国交正常化提言

高 村 忠 成

1968年9月8日、日本列島に激震が走りました。当時、創価学会の会長であった池田大作先生が、日中国交正常化提言を2万名の学生を前に発表されたのです。そのニュースは、その日の夕刻と翌朝のマスコミで大きく取り上げられ、世界を駆けめぐりました。

池田会長が、この提言を行う場として選んだのは、創価学会第11回学生部総会の席上であり、当時、東京・両国にあった日本大学の講堂でした。私はその時、学生部の責任者の一人として、進行・壇上役員をやっており、池田会長の講演を間近か度うかがわせていただきました。当時の衝撃は、未だに私の脳裏にやきついており、離れることはありません。

今回は、こうした歴史の現場に居合わせた証人の立場から、「歴史をかえた日中国交正常化提言」の背景をさぐりながら、その意義を考えてみたいと思います。

ちなみに、久しぶりに40年前の日記をひもといてみましたら次のように記されていきました。「池田先生の講演、1時間17分に及ぶ。400字詰め原稿用紙で50数枚分との事。なかでも圧巻は日中国交回復を訴えられたことである。場内、異常な熱気につつまれ、先生の講演が終わった時は、爆発的な賛同の拍手が日大講堂の大鉄傘をゆるがして鳴りやまず。歴史の歯車が大きく回転したことを実感する」と。じつにこの提言が行われた日のことについては、今でも私の脳裏に鮮明によみがえってまいります。

では、最初にもうにも有名なことではありますが、池田会長は、当時日中関係のあり方として何を提言されたのか、この点を確認しておきたいと思います。それは、次の3点からなっておりました。

「第1に、中国の存在を正式に承認し、国交正常化をはかること。第2に、中国の国連における正当な地位を回復すること。第3に、経済・文化的な交流を推進すること」であります。すなわち、大陸中国を正式に国家として承認し、日本はその中国と国交を正常化すべきであると訴えられたのです。

当時日本は、1952年の台湾国民党政府との間の平和条約をもって、講和問題は解決済みとの立場をとっており、7億の中国大陆の民衆のことは全く無視しておりました。しかも、冷戦構造の中にあって、アメリカに追従しており、大陸中国を容認することは、共産主義者とのレッテルを貼られることでもありました。一部の心

ある人は、中国との交流を早くから提唱しておりましたが、時の政権をはじめ、全体的な日本社会の風潮は圧倒的に反中日の空気につつまれておりました。いな、反中国というよりも、それ以上に中国との国交などは考えられない、絵空事、想定外という感覚の方が強かったというのが正確かもしれません。

こうした中であって、池田会長は、中国との国交正常化を提唱されたのです。それだけに当時、この提言は賛否両論を巻きおこし、大きな波紋をよびおこしました。とくに、反対論者からは、なぜ宗教者が共産主義を容認するのか、というような感情論も続出しました。それでも全体として、池田会長の発言が、中国問題を考える大きなきっかけとなり、日中関係に無関心であった人たちの意識を覚醒させるうえで一石を投じたことは事実です。

当時、私が在籍していた大学でも、学生有志が池田会長の提言全文を掲載した新聞を学内で販売しようということとなり、学友とスタンドをたて「池田会長、日中問題について重要提言」というのぼりをたてて、宣伝したところ、とぶように新聞が売れました。用意した部数は、アッという間になくなり「もっとないか」、「もう終わりですか」との声が殺到したことを覚えております。ただ、右翼系の学生団体からは「おまえたちは、いつから共産主義者の手下になったのだ」と罵声を浴びせられました。ともあれ、当時、池田会長の日中国交正常化提言が、国内外に大きな反響をよびおこし、日中関係史の新たな舞台を開く第一歩となったことは事実であります。

では、池田会長はなぜ日中国交正常化提言を行ったのでしょうか、その背景を考えてみたいと思います。

第1に、会長自身の歴史観、世界観からであります。会長は、日本と中国は、歴史的伝統、民族的な親近性、また地理的条件などから考えて一衣帯水の関係にある。切っても切り離せない仲にあるとあってよい。それを、かつての日本軍国主義政府は、ふみにじってしまった。この歴史の汚点はいつかはぬぐいさり、日中両国は2千年にわたる友好の橋を再び強固なものにする必要がある、と考えておりました。

一部保守派の間には、共産主義国中国は、侵略的で危険な国であるとの見方がありましたが、会長は「それは正しくない。毛沢東主義は、本質的には民族主義に近く、東洋的な伝統を引き継いでいる。中国が「武力をもって侵略戦争を始めることは、過去のその国の歴史に照らしてみても考えられない」と喝破したのです。

「むしろ、今世界をみると、世界の不安定、危機を招いているのはアジアである。アジアの貧困、自由圏のアジアと共産圏のアジアとの隔絶と対立と不信感、これを変えなくては世界の本当の平和はない。日本が今、中国との友好関係を樹立することは、アジアの中の東西の対立を緩和し、解消することになる」。

このような、歴史観、また国際政治の見方のうえから、池田会長は、日中国交正常化は断じて行わなければならないと主張したのであります。アメリカが、中国に国連の代表権を与えないために、日本もそれに同調するという姿勢に池田会長は断固として反対します。「日本は対米追従主義ではなく、独立国である以上、独自の

信念で自主外交を進めていくべきである。地球上の人口の4分の1を占める中国が国連から排除されている現状は国連の欠陥である。これを解決するのが、真の国連中心主義である」と強調されたのであります。池田会長は、共産主義を礼賛して、日中国交正常化を提言したものではありません。国際社会の動向のうえから、「アジアはもとより世界平和のために、日本はいかなる国とも仲良くしていく必要がある。国境をこえた友情を確立することが今最も要請されていることである。日中問題の解決なくして戦後が終ったとはいえない」とさげられたのであります。

第2に、恩師戸田城聖先生の遺訓です。池田会長は、戸田先生に師事し、約10年間にわたり、いわゆる「戸田大学」であらゆる学問の薫陶を受けました。その中でもとくに、戸田先生が気にかけておられたのが、アジアの平和と安定、アジアの民衆の幸福と繁栄でした。戸田先生のアジアに対する思いは、1956年に詠まれた歌の中に凝縮されております。すなわち、そこには、「雲の井に 月こそ見んと願いてし アジアの民に 日をぞ送らん」とうたわれておりました。それは、アジアの人々を幸福にしないでおくものかとの執念に燃えておりました。そして戸田先生は、アジアの中でもとくに中国には深い思いを寄せておられました。池田会長にも、漢詩、中国文学を講義され、とくに「三国志」を通して、人の見方、時代の見ぬき方を示唆されたのです。こうした中から池田会長には、中国やアジアに対する親近感が強く醸成されていったといえましょう。

第3に、宗教者の社会的使命感の発露からであります。池田会長は、1983年から毎年「SGIの日」を記念して、1月26日に平和提言を発表しております。そこでは、世界の現状をいかにとらえ、問題点を摘出し、いかにすれば、世界を平和の方向にもっていけるかについて克明に論じ、世界に警鐘を鳴らしております。今年26回を迎えたこの提言は、すでに世界の識者の間に定着し、高い評価をえているといっても過言ではありません。

じつは、池田会長のこうした社会的な提言は、「SGI記念提言」が始まりではありません。かなり以前から創価学会の本部総会などでは、時の重要な問題を取り上げ、それについての会長自身の、または創価学会としての見解を発表されてこられました。日中国交正常化提言がなされた1968年も、5月3日の創価学会本部総会では、池田会長は核兵器の廃絶をとりあげられ、そのために核保有5カ国の首脳が一刻も早く一堂に会して、核兵器の全廃について話し合うように提言されたのです。これはあたかも、戸田城聖先生が、創価学会の「若人の祭典」という体育大会で、「原水爆禁止宣言」を発表されたことを思い起こさせるものでした。池田会長は、宗教者は宗教という枠の中に閉じこもってはいけません。社会的使命感をもち、宗教的情熱で社会を変革する必要があると訴えられております。こうした観点から、池田会長は、ベトナム問題の次は中国問題である。中国問題の解決なくして、真の世界平和はないと洞察していたのであります。

1967年には、時の佐藤政権が中国敵視政策を強化し、中国でも文化大革命が猛威をふるっておりました。ソ連大使館やイギリスの代理事務所には中国人のデモ隊や紅衛兵が乱入し、これらの事件を通して、国際的にも中国に対する批判が高ま

り、中国は孤立化の道を深めておりました。同年12月には、LT貿易が期限切れとなり、日中関係の打開の道は全く見通しがたっておりませんでした。

こうした中で、池田会長の思いはただひとつ。「こんな事態が続く、中国がいつまでも世界の孤児のような状態では7億の民が可哀想である。今こそ日中国交正常化の道を断じてひらこう。私は仏法者である。人々の幸福と世界平和の実現は、仏法者の社会的使命である。何が起ころうとも断行する決意を固めるしかない」。これが、当時の池田会長の心情でした。仏法を信奉する者として、世界が日本が、奈落の底に向かっていくのをくい止めようとするやむにやまれぬ気持ちが爆発したのです。

とくに、池田会長の胸には、自身の戦争体験から去来する中国人民に対する憐憫の情が脈打っておりまして。それは、中国に出征した兄が、帰国したおり、「中国人はあれでは可哀想だ。日本の軍国主義は本当に悪い」と激怒している姿でした。また父の、「戦争なんかはするものではない。両国の人民が不幸になるだけだ」との言葉も脳裏に焼き付いて離れませんでした。さらに、恩師戸田城聖先生のアジアの民衆の救済をさげびつづける声も耳から離れることはなかったのです。

こうした池田会長の原体験が宗教者の社会的使命感となって燃焼し、中国の7億の民を救わなくてはならない。アジアの安定と繁栄をはかる必要がある。世界平和を断じて達成することが急務である。それには、日中関係の正常化をはかることが、ひとつの大きな鍵であるとの結論になったのであります。

以上、池田会長の日中国交正常化提言の背景について考えてまいりましたが、次にこの提言に関連して3点強調しておきたいことがあります。

第1に、日中国交正常化を果たすための方法論の問題です。国交正常化は困難な問題かもしれない。しかし、それを成就するには、いわゆる帰納的方法ではなく演繹的方法を用いる必要があると訴えたのです。すなわち、国交正常化をはかるために、当面の困難な問題を実務者レベルで、ひとつひとつ下から解決をはかってからというのではなく、まず、両国の首脳、最高責任者が直接会って、基本的な平和への共通意思を確認し、大局観、基本線から固めていくということが肝要であるということです。この演繹的な方法をとる限り、日中国交正常化は必ず成功するというのが、池田会長の信念でした。後に日中国交正常化がなされた時、ほぼこの線に沿って行われたことは周知の事実です。

第2に、日中友好は一朝一夕にはできない。これから時間をかけ、数世代にわたって築きあげていくべきものであるとの認識が池田会長にはあったことです。そのために、会長は、日中国交正常化提言発表の場として、次代を担う学生の集会を選んだのでした。若い人の力によって、これからの新しい日中関係を永続させてもらいたいとの悲願がそこには込められていました。とくに、日中間の諸問題は、日中戦争の延長線上にある。そのために、未来に生きる日中両国の青年には、かつての戦争の傷を引きづってもらいたくない。それには、日中友好の確かな路線を構築する必要がある。日中間にはこれまでも長い友好の歴史があったように、これからもまた、長い時間をかけて良好な関係を樹立していかなければならない。そのために

も、とくに青年、学徒のこれからの役割に池田会長はすべてを託したのであります。

第3に、池田会長は日中国交正常化、日中友好関係の必要性をたんに主張しただけに終わらず、自ら率先してそれを実行したということです。いうだけならある意味では簡単です。問題は自ら言ったこと、主張したことをいかに実践するか、実行するかということが大切になります。池田会長はたんに日中友好を唱えて終わるだけではありませんでした。自らの信念を断固として実現しようと全力を傾注したのです。それは、以下の点においてみることができます。

第1に、自ら10回訪中し、中国のあらゆるレベルの人々との交流をはかってきたことです。とくに、周恩来、鄧小平、江沢民、胡錦濤という歴代の中国の国家指導者と親交を深めてきたことは特筆すべきものがあります。日本の現在の国家指導者で、4世代にわたり中国首脳との深いパイプをもっている人はいないのではないのでしょうか。それほど、池田会長は、中国の人々の間に信用がある。中国がある意味で最も困難な時、日中国交正常化を提言された。アジア及び世界の平和のために、日中友好が肝要であると大胆に主張した。その恩を中国の首脳は永遠に忘れないのです。「井戸の水を飲む時は、それを掘った人のことを忘れるな」—これはあまりにも有名な中国の諺です。池田会長は、日中国交正常化提言を行って以来、40年間、日中友好のために生命を削って、道を開いてこられたのです。

第2に、日中友好のための人材を育成してきたことです。国家間の友好関係といってもそれを担う人材を育成することが根本であることはいうまでもありません。日中友好に貢献する人材をどれ位排出するかが勝負です。日中国交回復が成立した時、中国政府はこうした観点から、初の国費留学生6人を日本に派遣しようとしていました。いくつか有力な大学に受け入れの打診をいたしましたが、しかし、殆んどどの大学がまだ受け入れの準備が整っていないとの理由でことわってまいりました。困った当時の符浩駐日大使は池田会長に相談しました。「創価大学に入学させていただけませんか」と。会長は即座に「お引き受けいたしましょう。私がその6人の留学生の保証人になります」といわれました。大使は大変に驚かれ、「池田会長、本当に感謝申し上げます」といわれました。こうして中国からの正式な第1回国費留学生は創価大学に入学してきたのです。

創価大学で受け入れてからの池田会長の6人に対する激励は、それはそれは大変なものがありました。来学されるたびに会長は6人と会い、「困っていることはないか」、「なにか希望は」と、それこそ本当の父親のようにかゆい所に手がとどくように面倒をみられたのです。その結果、6人の留学生は日本語の堪能な立派な人材として成長され、今日では外交をはじめ多くの分野で目ざましい活躍をされておられます。彼らの口ぐせは、「私は創大生です。池田先生の学生です。疲れた時は、創価大学へ帰ります。そこが私の第2の故郷です」ということです。このように、日中国交回復がなった時からすぐに、池田会長は、両国の発展を担う人材の育成に手作りで取組まれたのです。今日では多くの中国の留学生が日本に来て学び、日本人も数多く中国へ留学していますが、日中国交回復が成立した時は、以上のような

状況であったのです。

第3に、池田会長が提言で示された通り、日中の文化交流に力を入れたことです。1975年には、北京歌舞団を、1976年には上海京劇団を創価大学に招き、それぞれ創大のグラウンドで5万人の青年が集まって、盛大な公演が行われたことを私は昨日のここのように思い出します。はじめて見る中国の見事な伝統芸術に、当時の多くの青年は圧倒され、中国への理解が一気に深まり、中国への親近感がグッと増したのです。その後も民音を通じて中国との文化交流は毎年のように続けられ、2008年6-7月にも東京富士美術館で「大三国志展」が開催されて、大きな反響をよびました。

このように池田会長は、たんに日中国交正常化を提言するだけで終わることなく、今日にいたるまで、一貫して日中友好のために尽力されているのです。この戦いはこれからもまだ永遠に続けられていくものと思います。こうした池田会長の功績に対して、中国の称賛はやむことはありません。前述しましたように、中国の国家指導者は、来日をされた折などには必ず池田会長との会見を希望されます。また、中国の多くの大学が名誉学術称号を池田会長に贈っております。池田会長が、中国の大学から受けている名誉学長、名誉博士号、名誉教授称号などは、2008年9月現在、80を超えています。ちなみに、全世界から会長が受けている名誉学術称号は全部で242になります(2008年9月現在)。

さらに、池田会長の思想、哲学、文学、芸術などを研究しようと中国の23の大学に「池田大作研究所」などが設立され、中国の多くの研究者が池田会長の人物像について、本格的な学術研究を行っております。現存する人物について、これほど大がかりな学術研究がなされているというのは世界でも例がないのではないかと思います。中国の各界の人々が池田会長に対して寄せる思いがどれほどのものか、私はただただ驚嘆する以外にありません。

思えば、40年前のあの提言で、歴史の歯車は大きく変わりました。日中関係は飛躍的に前進し、アジアの時代が開幕したのです。今また、次の40年先の時代を展望した時、良好な日中関係の発展なくして、日本、中国も次の発展はのぞめません。アジアや世界の安定もないといってよいでしょう。

私たちは、これからいかなることがあっても、40年前の池田会長の日中国交正常化提言の精神を思い起こし、これからも日中友好のために全力をあげてまいりたいと思います。あの提言は、40年前の歴史的文書ではなく、これからの時代を拓く、未来への指南書として、今後も永遠に光彩を放っていくものと確信いたします。

参考文献

池田大作『新人間革命 13』(聖教新聞社、2004年)。

池田大作『中国の人間革命』(聖教新聞社、1979年)。

国分良成『中華人民共和国』(ちくま新書、1999年)。

中嶋嶺雄編『中国現代史 壮大なる歴史のドラマ』(有斐閣 昭和61年)。

宇野重昭・小林弘二・矢吹晋『現代中国の歴史 1949-1985 毛沢東時代から鄧小平時代へ』（有斐閣 昭和61年）。

※ 本文は、2008年9月14日、創価大学本部棟国際会議場で開催された、池田先生の「日中国交正常化提言（1968年9月8日）40周年」を記念するシンポジウムで発言したものである。これには、中国・北京大学の王緝思国際関係学院長、同・中国社会科学院の金熙徳日本研究所副所長、早稲田大学の天兒慧大学院アジア太平洋研究科長がパネリストとして出席された。重厚な示唆に富む議論が展開され有意義であった。